

## 千里の道も一歩から くもう誰一人として取り残さぬようにく

東京都 白百合学園高等学校 3年 齊藤 さくら

2020年。私達が成人する年。そして東京オリンピックが開催される年。オリンピックの会場である日本は準備に躍起になっている。だが、オリンピックの存在さえ知らず世界の片隅でひっそり暮らしている人々のことを私達は忘れていないだろうか。

私はカンボジアのスラム街で、ゴミ山の中で暮らす人々と出会った。彼らには明日の食べ物保障さえなかった。それにもかかわらず、彼らに声をかけ手を差し伸べる人はほほいさないに等しい。私には、そこが世界から切り離されているように感じた。このように世界では、最も救われるべき人が救われていない。また、私が尊敬する国境なき医師団の白川優子さんの著書からは、紛争地には人間としての尊厳を奪われ、まるで物のように扱われる死が存在することを学んだ。憎しみが連鎖し、助けても助けても助からない命がこの世にはあるのだ。

だが、経済的に豊かな私達はこのような現状に無関心でその実態すら知らうとしない場合がほとんどである。なぜなら、どこか遠くの世界で起こっている紛争や飢饉は自分達の「外」の世界のことで、直接的に被害が及ばないことを私達は知っているからだ。メディアで残酷な紛争の様子が映し出され、たとえ一瞬心を痛めたとしても次の瞬間忘れてしまう。現代の私達の特徴である。

では、救うべき人を救える力が備わっている私達が彼らから目を背けてしまったら、一体誰が彼らを救えるというのか。私は、助けを必要としている人に目を向け手を差し伸べ続けていきたい。

私には、看護師として目の前で苦しむ人の癒しとなり、助産師として母と未来を担う子供の命を繋ぐという夢がある。紛争や迫害、貧困下で計り知れぬ絶望を抱える人々に私ができることは、傷ついている人の包帯を取り換え、衛生状態が万全ではない中で赤ちゃんを取り上げることくらいだろう。それでも、苦悩する人の心の声に耳を傾けながら語り合うことで、彼らの人生を少しでも変えられるかもしれない。また生まれてくる新しい命に心から「おめでとう」と声をかけることで、希望を与えられるかもしれない。マザーテレサは、「大切なのは、どれだけ多くのことをしたかではなく、どれだけ心を込めたかです」という言葉を残した。私は、小さな行いを一つ一つ大切にしていきたい。

それでもやはり、世界を変えていくには私一人の力では限界がある。だが私には、共に良い世界を築いていける素晴らしい仲間が日本中、そして世界中にいる。私は昨年青少年のボランティア支援プログラムであるボランティア・スピリット・アワードという大会に参加し、全国大会に進出した。さらに全国大会では、国内や途上国での活動を全国の仲間から賞賛していただき、米国ボランティア親善大使に選出された。そして今年の春、親善大使として渡米したのだ。

米国では、100名の米国受賞者と8カ国からの親善大使たちと全米表彰式やボランティア活動といったプログラムを共に過ごした。他者の幸せのために、という熱い情熱をもって世界各地から集まった私達は強い絆で結ばれた。彼らは、社会全体に影響を与えるような大規模な活動をしていた。中には自分自身が重病を患ったり大切な人を亡くしたりと、苦しみを抱えている人も多くいた。だが、彼らはその苦しみを他者の幸せのためのエネルギーに変え、負担や犠牲をいとわず社会に貢献していた。私は渡米して、愛に溢れた社会の存在を実感した。

「私達が力を合わせれば、必ず世界を変えられる」。米国で同世代の仲間が力強く口にした言葉を

私は忘れない。むしろ、世界では紛争や核兵器の脅威が後を絶たない。だが、それと同時に、深い愛を持ち世界を本気で変えようとしている若者が世界中にいることを私は一人でも多くの人に知ってほしい。そして私自身も世界を変えることに貢献する一員となり、仲間と一緒に優しさで愛の輪を世界に広げていける人でありたいと切に思う。

今後はITの時代が到来し、さらに機械化が進むだろう。だが、機械は世界の片隅でひっそりと暮らす人に目を向けることはできない。彼らに手を差し伸べ寄り添うことができるのは、やはり心を持った私達人間なのだ。

千里の道も一歩から。まずは、普段より少しだけ視野を広く持つて周囲を見渡してみよう。不安そうな顔をしている人、一人で苦しんでいる人があなたの周りにいないだろうか。そういう人に微笑み、声をかけることから始めてみよう。目の前にある道を一步一步踏みしめていけば、気が付いて振り返った時、世界はきつと変わっている。

2020年。私達が成人する年。そして次世代を担う私達が、新たな一歩を踏み出す年。もう誰一人として取り残さぬように。

